余山貝塚に幻を視る

見てきたような嘘つき講釈師 おなじみグータラ隠居（秀）

市民の会ニュース 122 号と合わせてご覧くださると、更に楽しめます。ホームページをご参照ください　編集部

時は、今から3500 年前、縄文時代の後期から晩期。所は、縄文の当時、今の利根川のあたりは、後に「香取の海」とも呼ばれるようになる「古鬼怒湾」、波穏やかな内湾の入り江に面した、縄文余山の集落でございます。

縄文の人々の朝は早い。古鬼怒湾の入り江に朝陽が射し始める頃、目の前の遠浅の静かな海の砂浜では、女や子供たちがチョウセンハマグリなどの貝類を採取しており、中には水遊びを始めてしまい、ずぶぬれの子供たちまでおります。波静かな内湾に仕掛けられた網にはクロダイやスズキ、今朝はアシカまでかかっており、大漁の小舟で男たちが帰って来ます。

家々からは朝餉の煙が立ち昇り、集落の後背の湿地では、カモやアホウドリなど水鳥がエサをついばみ、乱舞する、縄文余山の朝。

お日様がその位置を高くする頃、屈強な男達は、余山の南側に広がる高さ50 mほどの平坦な台地、下総台地へと向かって行きます。余山の南側、左右いっぱいに遠望される下総台地、その北の縁は今、急な斜面の緑の森となっておりますが、ここ余山のあたりに大地（沖積層）が現れるまでは、下総台地が直接海の波によって削られ、海に食べられ崖となった「海食崖」、今の屏風ケ浦と同じような姿であったのです。下総台地の上は、今は畑として利用されるほどの平坦な土地、縄文の当時は、草原や森が広がり、鹿や猪など多彩な動物たちの生活の場、男たちは平原を駆け巡り、鹿を追い、猪を捕えています。

余山の集落からは、子供たちを連れたお母さんたちが木の実の採取に、下総台地への坂道を、歌をうたいながら登っております。

やがて、籠いっぱいの木の実を手に提げた娘さん、疲れて眠りこける子供をおんぶするお母さん。そのはるか後ろからは、沢山の獲物を肩にかついで、意気揚々と引き上げてきた男達、集落はにぎわってきました。

夕陽が空を紅く染める頃、北関東の人々が、小舟で余山へと到着します。

双方の特産品の交換と宴の始まり。余山の特産品「貝製腕輪」はいつも人気度ナンバーワン。宴が始まり、歌や踊りで盛り上がり、賑わう余山。ここ余山は、北総台地に近く、台地の上では最近増えてきているイノシシを始めとする、シカなど多彩な動物たちが沢山おり、山の幸にも恵まれ、台地と集落の間、今は水田として利用される湿地帯は水鳥たちの楽園。北側、古鬼怒湾の静かな海には多彩な海の幸があり、下総台地を構成する犬吠層群と香取層、古い泥の層と新しい砂の層との境あたりから湧き出る清水は、高田川の清流となり、縄文の人々の生活用水も十分に確保されておりました。

縄文余山は、海の幸、山の幸、水辺の幸に恵まれた「とても住みやすい土地」海や山からの多彩な食べ物が容易に手に入り、住みやすい土地柄。このような生活環境の背景があったからこそ、国指定の重要文化財「みみずく土偶」や、余山のブレスレット「貝製腕輪」が作られるほど「高度な加工技術を持った、文化度の高い縄文の人々が暮らす余山」であったんだろうと幻視します。

縄文時代の余山。

幻を視ていただけましたでしょうか。

「秀」

海岸清掃　黒生海岸　伊藤 光徳

黒生海岸

9月3日は海岸清掃日。黒生海岸でした。参加者は新人の方やナルクを含む19 人。天候もこれまでの猛暑が一転、午後から雨予想で、これから1週間は雨模様とのこと。

黒生は、4ヶ月ごとの海岸清掃だが相変わらずゴミは減っておらず、むしろバーベキューの残骸や道具の放置、地元の人たちが捨てたと思われる冷蔵庫や家具、ロープの端切れや不要漁具の放置など嘆かわしい限りである。しかし、清掃の継続は宝なり。

12 年前安藤生大教授は犬岩の前で、捨てられたガラス板の上に乗ってジオ講義をされた。現在はといえば、テレビやガラスも捨てられなくなり、全体的に綺麗さを保たれ、その中でガイドもできるようになっている。

ここ黒生も諦めず継続しSDGｓの理念の元、魚や亀がマイクロプラスチックを食べぬよう、カモメが放置されたテグスやロープに絡まぬよう、清掃の継続、そして何よりもきれいな海岸、海を次世代に残せるよう皆さん頑張りましょう!!

「ラズリナ」